太宰治『駈込み訴へ』論
――ユダの〈愛〉のかたち――

田中陽子

一　ユダとイエスの関係
――ユダの自覚的立場から

太宰治の「駈込み訴へ」(注1)は、新約聖書を直接の題材とし、ユダがイエスを裏切る顛末をユダ本人が一人称で訴える形式をとった大胆な翻案小説である。本作が口述筆記で書かれた事実は有名なエピソードであり(注2)、その製作過程から本作のユダと太宰本人を重ね合わせて論じられることが極めて多い。

渡部芳紀氏は太宰本人の数々の裏切り体験を「ユダの裏切りの中に投影さした」とし、太宰の前期の姿がイエスに、中期の姿がユダに投影されていると指摘した(注3)。佐藤泰正氏は「〈想世界〉と〈実世界〉に生きるイエスとユダ――この両者の葛藤はまた太宰自身のものでもある」と、広く太宰本人を読み取る立場を取る(注4)。また、さらに本作の背景を限定した論として、亀井勝一郎氏は「青年期における左翼非合法運動からの離脱と、そこでの心理的体験」が作品内に投影されたとしている(注5)。このように、特に研究の初期段階において、ユダの原型を太宰本人から見出す論が多数著された。

しかし、太宰が描き出したユダの特徴については、いまだ考察の余地があるように思われる。大胆なパロディ小説としての『駈込み訴へ』を考えるとき、確かに作者の投影や執筆意図を読み取ることも重要であるが、まずは長く「錯乱」と言われ、太宰本人と同一視される傾向にあったユダの人物像を詳細に解明することが求められるのではないだろうか(注6)。本論では始めにイエスとユダの関係性を改めて考察することで『駈込み訴へ』を再度とらえなおしてみたい。イエスとユダは師弟関係であり、彼らの上下関係はゆるぎないものであるが、ならばユダが自覚的に認識していたイエスとの立場の差はどうだったのか。それを踏まえて後半では、太宰のユダの人間性および社会性からみる『駈込み訴へ』の新たな解釈の可能性を提示してみたい。

ユダは作品内でしばしばイエスとの年齢差について言及し、たいした違いがない、二人は同じ年齢だと訴え続けている。つまり、『駈込み訴へ』はイエスを告発する物語でありながら、同時にユダとイエスの

立場の対等さを訴える物語でもあるのである。二人の同等関係を主張するユダは、〈人間〉イエスに対して非常な対抗意識を燃やしている。このように対抗意識を持つということは現在二人が置かれている状況を変えられる可能性が少しでもあると認識しているということである。特にイエスを売る場面では、イエスとユダの立場が対等であるということを「旦那さま」に認めさせようとしているのは明らかである。そして最終的にはイエスと肩を並べて立つことで、ユダはイエスとの対等な関係を宣言するようになる。これにより、ユダが自分自身をイエスと対等な関係であるとみなしたがっていることが確認できる。それも特に年齢差についての発言が顕著であり、ユダのこだわりは異様なほどである。では、ユダのこの価値観はどこから生まれてくるものなのか。

太宰のユダ独特の特徴と言えるのが、イエスを愛しているという驚愕の事実である。それもイエスの説く「隣人愛」とは到底かけ離れた、無報酬と言いながら「どうして受け取つて下さらぬのか」という独善的な〈愛〉である。ユダは繰り返しイエスに激しくも自分勝手な〈愛〉をぶつけていく。ユダのイエスへの異常な執着ぶりは一線を超えており、師への憧れとも同輩への友情とも違った〈愛〉をうかがうことができる。春の海辺の場面では、ユダとイエスとイエスの母マリヤの三人で暮らそうと提案していたにもかかわらず、その直後に「私とたつた二人きりで一生永く生きてゐてもらひたいのだ」という発言をしていることは驚くべきことである。ユダがイエスに求めている〈愛〉とは、どこまでも閉鎖的でどこまでも永遠な、一生涯続く独占欲を隠しもしない〈愛〉なのである。そしてユダの〈愛〉がどうにも受け入れてもらえないと気づくと「私は、だめだ。あの人に心の底から、きらはれてゐる。売らう。売らう。あの人を、殺さう。さうして私も共に死ぬのだ」と、短絡的な永遠の〈愛〉の成就へと走っていく。このように、ユダの〈愛〉は他の弟子もイエスの家族や将来の妻さえも排除した、イエスその人に限定された感情であり、実際ベタニアのマリヤにまで嫉妬を覚えるほど際どい感情が描かれている。

以上のことから、ユダがイエスに向ける〈愛〉は、極めて恋愛感情に近い盲目的な感情であると言えるだろう。極論ではあろうが、男性が男性に愛情を向けているのだから〈同性愛的〉であるとすら言える。イエスへの独占欲を隠しもしないユダの〈愛〉は、師に対しての感情を越えて〈同性愛的〉であると捉えることができ、ユダはイエスに対して、性別のくくりを超えた凄まじい執着と愛憎を抱いているのである。

しかし現在、ユダの〈愛〉を〈同性愛的〉欲望として捉えている論者はほとんどいない。ユダの〈愛〉にアガペーの愛の側面を捉えている論者はいても[注7]、〈同性愛的〉な欲を含んだ〈愛〉として取り扱われることは少ない。だが、ユダのイエスへの〈愛〉は、男性が女性に対して持つような精神的肉体的欲望を包含する愛情とどこが違うのだろうか。本作のユダは、イエスに対して独占欲を剥き出しにし、「愛してゐる」と繰り返し、イエスに足を洗ってもらうシーンでは「天国を

見たのかも知れない」と、恍惚とした快感すら覚えているようなのである。ユダのこの態度を、どう解釈すればよいのだろうか。ユダの〈愛〉の根源的部分は実は意外と単純なところにあったのではないか。

ユダの愛情の本質について言及した論者に高橋清隆氏がいる。高橋氏はユダの〈愛〉の中身についてこう指摘する[注8]。

> イエスとユダは、友情とも異なる、また、師弟愛とも異なる関係であったと思われる。少なくとも、ユダの側からは、そのような関係ではなかった。（中略）これが、友情・師弟愛の言葉だろうか。ここにあるのは、まさに恋愛のそれではないか。

確かに本作におけるユダのイエスに対する感情はあまりに激しすぎて、〈同性愛的〉なニュアンスを感じてしまう可能性がある。しかしここで問題となるのは、ユダとイエスが同性愛的関係であったか否かではなく、もちろん高橋氏もイエスとユダの関係が同性愛の関係であるか否かは重要視していない。すなわち、なぜにユダの感情がそのようなエロスの方向へと走ってしまったかということである。佐藤泰正氏もユダの態度にエロス的な感情を見ているが[注9]、高橋氏はさらに直接的に〈同性愛的〉という表現を使用している。今まで確認してきたように、ユダがイエスに向ける〈愛〉は極めて独善的で利己的である。しかも、男性が男性に向けて一生一緒に暮らそうと言う提案は、師弟愛も男女の恋愛にも合致しない。ここにみられる、ユダのイエスへの〈愛〉の本質とはいったいどのようなものだったのだろうか。

ここで〈同性愛的〉という言葉の定義の確認をしておく。土居健郎氏によると〈同性愛的感情〉とは次のように定義されている[注10]。

> 同性愛的感情というのは狭義の同性愛のことではない。同性愛といえば、同性の間での性的魅力を感じ、性的結合を志向することを指していうが、同性愛的感情というのはもっと広義に解して、同性間の感情的連りが異性間のそれに比して優先する場合を指していうのである。（傍線は引用者による）

土居氏は〈同性愛的感情〉を〈甘え〉という観点から分析し定義している。〈甘え〉の最も簡単な定義として土居氏は「人間関係において相手の好意をあてにして振舞うことであると言っておこう。但しこの際最も肝腎なのは、そのことが自意識なしに自然に行われることである」と定義しており[注11]、この心理は本作のユダにも顕著に見受けられる。しかしユダのイエスへの〈愛〉で特徴的な点は、異性間の愛情に優先されるどころの話ではなく、何物にも優先されるべき〈愛〉であった点である。この点において、ユダは、土居氏の言う〈同性愛的感情〉や〈甘え〉の定義に示された〈愛〉よりも濃厚な感情を抱いていると言える。つまり、ユダという人間は、〈同性愛的感情〉や〈甘え〉の概念を凌駕する、激しい愛情を持った人間であると言うことができるのである。その感情がイエスただ一人に向かってしまった結果、異常な独占欲や執着心、異性に優先される〈愛〉が発露したのだろう。さらに「私とたつた二人きりで一生永く生きてゐてもらひたい」と、恋人を占有するかのように言うユダは、洗足の場面でのイエスとの肌の触れ合いを通してエロス的な〈愛〉を持つに至る。ユダがイエスの

「人間」を感じ、対等な関係を主張したのも、この独善的な〈愛〉を受け入れてもらうためだったと考えられる。ユダがイエスに求めていたのは、精神的肉体的に欲望を満たしてくれる存在としての「人間」イエスだったのではないだろうか。

二　『駈込み訴へ』にみられる日本的要素

一では、ユダの感情や〈愛〉が、同性に向けられるものとは思えないほどの過剰かつ過激な想いであったことを確認してきた。そこには、ユダとイエスが本来ならば同輩の関係であるのに、師弟関係という立場の差が絶対的に存在するという不条理があった。ユダはイエスを「人間」として捉えており、「神の子」イエスとのギャップを感じていた。それがイエスを〈愛〉するユダにとっての不満を増徴させたと考えられる。

ここで再度、イエスとユダの上下関係について考察してみたい。ユダはなぜ頑なに「年齢差」にこだわり、上下関係を対等にせんがためにイエスを「人間」として認識しようとしたのか。この理由を、これまではユダの〈愛〉の中身に求めた。すなわち「人間」イエスに〈愛〉を受け入れてもらうための手段として、無理やりにでも二人の立場を対等な関係にしたがっていた、という心理である。しかしユダの心理は本当にそれだけだったのか。一では文中から読み解ける、ユダの表面的な態度を中心に論じてきたが、今後はユダの深層心理を中心に論じていきたい。ユダが自覚的に認識している〈愛〉の問題とはまた別に、本論ではユダの無意識の心理を構成している価値観や、それに基づく〈愛〉を明らかにする必要もあるのではないかと考えるからである。

本作でのユダは繰り返しイエスへの〈愛〉を訴えているが、また二人の年齢に差がないことを主張し続けている。二人は本来なら同輩の関係であるはずだが、師弟関係という覆してはならない上下関係に束縛されている。ユダがこの不条理を問題視している点に注目したい。つまりユダは、師弟という絶対的権力の差がある関係を疎ましく思っていたということである。イエスと対等な関係になりたいというユダの思いは、この絶対的権力が横行している社会から生じたものではなかろうか。ここから、ユダは上下関係における権力差があまりにも強い社会に生まれ育った人間だと言うことが可能であろう。さらに先程来指摘してきたが、ユダは、イエスとの対等関係への強いこだわりと〈甘え〉、さらには〈同性愛的感情〉という二点を併せ持っており、その姿にはどこか日本人らしさのようなものが見え隠れしている気がしてならない。だが、ユダの資質として上下関係における権力差が強い社会に生まれ育った人間と言うことはできても、果たしてユダの感情は本当に日本的なのかということについてはさらなる考察が必要である。この問題を解決するため、ユダという人格が生み出される元になったと思われる社会構成について考えていきたい。ユダはどういう社会に生まれ、どういう価値観を植えつけられて育ち、どういう常識に

裏付けられた行動パターンや〈愛〉を持つようになったのだろうか。

まず確認しておくが、『駈込み訴へ』が、聖書を題材として執筆されたということは周知の事実である。しかし本文中には、聖書をモチーフとしながらも、なぜか日本的な要素が盛り込まれていることに気づく。題名の『駈込み訴へ』を始め、本文中の「右大臣、左大臣」「一厘」など、日本人に馴染み深い単語がちらほら見受けられる。これは作者が日本人だからという理由で読み飛ばしていい問題なのだろうか。日本的比喩表現と読めなくもないが、ではなぜわざわざ使用する必要があったのかという疑問が湧く。

本作の発表直後、林房雄は『駈込み訴へ』の読後感を次のように述べている〔注12〕。

> 最初の頁で島原か長崎あたりの切支丹物語かなと思つて読みはじめると、次の頁で、おやおやユダか、世紀元年のユダの物語かと気がつく奇妙な文体の作品である。

林が体験したように、本作の真実に気づくまでにはわずかなタイムラグが生じることがわかる。さらに文体においても、ユダの一人称であるため、主人公であるユダの名が末文まで登場しない。本作の構成上の特徴として、題名では『駈込み訴へ』という語で物語の内容を隠蔽し、冒頭部分においてはキリスト教の要素をさらに隠して読者を撹乱するために、まるで日本人が喋っているかのような文体に仕立て上げたものと思われる。ではなぜ太宰は聖書というモチーフを頑なに隠匿し、冒頭から日本的な要素を盛り込んで、読み手を一種の混乱状態に陥らせる作風にしたのだろうか。特に『駈込み訴へ』という題名は明らかに作為的である。この疑問点を解決することによって、ユダの言葉遣いや言動にみられる社会性が明らかにできるのではないかと考えている。

さて先程も確認したが、本作のユダが、人間関係において立場の差による上下関係が絶対不可侵であるという価値観を持っていたことは、ユダの〈愛〉を歪めた原因のひとつであると思われ、これも太宰のユダ独特の特徴と言える。ユダは、師弟という絶対的権力の差がある二人の現状をどうにかして対等にするために、イエスと平等な立場の関係を主張したそのうえで、自身の〈愛〉を押し付けるという方法をとった。その折、ユダはイエスに対して「お母のマリヤ様と、私と、それだけで静かな一生を、永く暮して行くことであります」と、イエスと〈家族〉になりたいような発言をしていること、さらには「私とたつた二人きりで一生永く生きてゐてもらひたい」と告げていることから、血縁者の母マリヤ以上にイエスの傍へ歩み寄りたいと望むユダの姿勢が明らかになっている。この二つの台詞からわかることは、ユダがイエスと関わる際に〈家族〉という形態で関わりたいという欲望を持っていることである。ではユダがここまで〈家族〉にこだわる理由とは何なのだろうか。

ここで、日本社会における〈家族〉について確認しておきたい。川島武宜氏は、日本の家族制度はひとつの強固な秩序であり、日本社会において〈家族〉以外は無秩序だと判断されると指摘した上で次のよ

うに述べている[注13]。

だが、このような家族外の世界においても人は多くの結合関係をつくる。（中略）かれらは、「家族的」にしか人の結合関係を意識することはできない。

それほどにわが国においては家族生活はわれわれを強くとらえている。かれらは、或いは家長的な権力者に頼りたがり、或いは家長的権力者になりたがる。言わば第二の親子関係、すなわち「親分子分」関係はかようにして必然性をもって作りだされる。

（傍線のみ引用者による）

これを『駈込み訴へ』にあてはめると、イエスが擬似的親、ユダが擬似的子という関係は一目瞭然であり、さらには二人の間に川島氏のいう「親分子分関係」が成立していると思われる。この「親分子分関係」には、擬似的とはいえ親子関係の要素も兼ね備えている以上、親孝行の問題も絡んでくるはずである。日本的親子、つまり儒教的親子関係は、次のような打算的考えを持って共同生活を行っていると川島氏は指摘する[注14]。

東洋的親孝行は、幼いときに子が親からうけた恩を後になって老いた親に「かえす」、親はこの期待の元に子の世話をし、且つ子にこのことを教えこむ、という取引交換的要素を持っている。

これが社会の中の人間関係に適応された場合、『駈込み訴へ』内ではイエスはユダにとって「恩」を与える関係になっていき、逆にユダがイエスに「孝」でもって「恩」返しをする必要性に迫られるという図式になる。つまり、日本社会では親子関係の中にも「御恩と奉公」に近い構図が描けるのである。すなわち、ユダのイエスへの〈愛〉が「あの人は、私の此の無報酬の、純粋の愛情を、どうして受け取つて下さらぬのか。」という等価交換的な〈愛〉になっているのは、子としての「孝」と弟子としての「忠」に対する見返りとして、イエスからの「恩」すなわち〈愛〉が戻ってくることを当然だと考えているためであろう。しかしユダは最後までイエスからの対価としての愛情を受け取ることはできなかった。ここに、ユダの生まれ育った社会の常識が見える。たとえ自身の働きに対しての「恩」が戻ってこなくても、従者の側から師弟関係を破棄することはできず、ユダはひたすらあがき続けるしかないのである。

このように、ユダの発言や姿勢には、川島武宣氏が述べるような、日本社会における「家族的人的結合」が確認できることから、ユダがなぜことさら報酬めいた〈愛〉を希求するのかが理解できる。だがここで注意したいのは、ユダが持つ「恩」と「孝」という価値観が、儒教的価値観からは逸脱しているということである。

儒教的価値観で「忠」と「孝」が対立した場合、「孝」が優先されるはずである。しかし、ユダには年老いた父母がいるにもかかわらず、彼らへの孝行は捨て置いて「私は才能ある、家も畠もある立派な青年です。それでも私は、あの人のために私の特権全部を捨てて来たのです」と、イエスに対する「忠」を優先している。この価値観は「教育勅語」[注15]に最も集約されているように思われる。

教育勅語では「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ」「父母ニ孝ニ」と第一に「忠」と「孝」をあげているにもかかわらず「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」という態度を尊んでいる。これは儒教的価値観とは明らかに異なっている。日本では、「忠」と「孝」が対立した場合、主君への「忠」を優先すべしと教育されているのである。これに基づきユダは父母よりもイエスを優先した可能性もあろう。ユダがイエスに対してぶつけていた〈愛〉のみならず、ユダのこのような日本的解釈がほどこされた価値観が、ユダに父母を捨ててまでイエスを選択させたのだと考えられるのである。

しかし、そうしてユダがすべてを捨てて主君に付き従ってきたにもかかわらず、イエスからの「恩」は与えられない。「御恩と奉公」のあるべき均衡が崩れ、ユダは「恩」のないまま一方的に主君であるイエスから搾取され続けることになる。このような「忠」と「恩」の関係の不一致が、ユダの愛情をゆがませていった原因の一つではないだろうか。

以上の考察により、ユダの価値観の特徴は次の四点にまとめられる。一点目は、年齢差や立場の上下の差が絶対不可侵である。二点目は、人間関係に「家族的結合」という名の上下関係が必ず構築される。三点目は、「御恩と奉公」の考え方により、尽くした分だけ「見返り」が与えられて当然である。四点目は、親への「孝」より主君への「忠」が優先される。

この四点の特徴から、ユダの価値観は限りなく日本的であると指摘することができよう。ユダの価値観は、江戸から明治、昭和初期を生きた人間には馴染み深い感覚である。キリスト教的世界において、本作のユダの考えがひどく自己中心的に映るのは、ユダの価値観が以上のような特徴を持つことに原因を求めることが可能である。太宰が描き出したユダは、キリスト教信者に受け入れられずとも、日本社会に置き換えればユダの考え方は理解できうる。すなわち、本作のユダは、日本的価値観を持って育った日本人だと言えるのではないだろうか。

さらに、『駈込み訴へ』が掲載された、昭和十五年二月号の『中央公論』の目次を見ると軍事関連の記事が目立つ。当時は皇紀二六〇〇年関連祝賀行事が多数行われ、数年前から万博やオリンピック誘致が計画されたほどであった。一九三〇年頃からじわじわと盛り上がった皇紀二六〇〇年祝賀ムードのなかで、どうして太宰は、当時最もメジャーな雑誌のひとつであった『中央公論』に、敵国の宗教であるキリスト教をモチーフとした物語を掲載することができたのだろうか。筆禍にの憂き目にあってもおかしくない内容であるのを、高見順氏が「昔も昔、大昔のユダの裏切りに現代心理の光りをあてて、才気煥発。」[注16]と指摘するように、なぜ当時の読者に受け入れられたのか。

この問題について、佐古純一郎氏は次のように述べている[注17]。

佐古　あの時代はもうイエスなんて書けないんですよ。（中略）

佐古　太宰はあの頃聖書を主題にしたのをずうっと書いていますからね。『駈込み訴え』なんかそうでしょう。『正義と

微笑』、まさしくそうでしょう。あの時期は日本の出版界ではヤソ教というのはそんなに大胆に書けない時期なんですよ。だからその頃によくも太宰があれだけストレートに聖書に取材した小説を集中的に書いた、今思うと私は大変なことだったなと思う。

この頃は、戦争開始以前から行われてきた言論統制が、検閲局により一層強制された時期であった。作家にとって自由を奪われたに等しい状況下で、しかし太宰は飽きることなく聖書をモチーフにした作品を発表し続けている。このような緊迫した雰囲気の時代に、太宰が『駈込み訴へ』を執筆し、それを『中央公論』に掲載できたということは奇蹟のようなものであったことには違いない。ではなぜ、『駈込み訴へ』はキリスト教の要素を持ちながらも『中央公論』というメジャーな雑誌の、しかも政変号へ掲載する運びとなったのか。それだけの危険を冒してまで太宰が訴えたかったものとはいったい何だったのであろうか。

本作が『中央公論』に掲載された理由は、『駈込み訴へ』という題名を始めとする数多の日本的要素と、純粋なキリスト者には到底受け入れがたいユダ像を赤裸々に描写することで、検閲の目を誤魔化せたためかもしれない。ただし、周知の事実ながら太宰がキリスト教について深く悩んでいたことも確かである。あのような時勢でも、高見の例にあるように本作が受け入れられたのは、読者がユダの姿に当時の日本人キリスト者の苦悩を読み取っていたからに違いなかろう。イエスの教えを必ずしも守れない弱さを持つ人間にとって、本作のユダは多大な共感を持って受け入れられたと思われる。そして、今まで確認してきたように、太宰が描き出したユダとは、イエスについていった日本人であるとも言うことができる。本作は舞台となったキリスト教要素を排除しても、師弟関係の愛憎劇という解釈が十分に成立する物語なのである。

なお『駈込み訴へ』は、皇紀二六〇〇年にあたる昭和十五年に初出、その二年後には和綴じ装丁の限定私家本を三〇〇部配布している。なぜ太宰は、イエスとユダの物語をあえて和綴じ本という装丁で配布したのか、またその必要がどこにあったのか。後にも先にも、太宰が私家版を発行したのは『駈込み訴へ』をおいて他に無く、太宰が本作に込めた自信がうかがえる。そして、太宰がキリスト教から直接モチーフを得た唯一といっていいほどの作品を、わざわざ皇紀二六〇〇年に合わせて発表し、その後、まるで日本という箱の中に閉じ込めるかのように和綴じ装丁で出版したのは、キリスト教と日本思想の融合を示唆しているのではないだろうか。

よって、本作のテーマはキリスト教的題材そのものにあるのではない。あくまでも太宰の書きたかったものは人間同士の葛藤であり、対立であり、また愛憎の物語であっただろうと推測されるのである。

また、キリスト教的世界をモチーフにした作品内で、ここまで自己中心的な〈愛〉を持ち、さらに自身の正当化を行うべく自己弁護するユダという人物像が日本人作家によって書かれた点は注目してよいだ

ろう。ユダの感情は、人間として生まれた以上、持って当然の感情ばかりである。それは、唯一絶対と認めた人に愛されたい、仕事を認めてもらいたい、優しい言葉をかけてもらいたい、寂しい気持ちを共有したいといった、相手からの〈愛〉が返されることを望む純粋な気持ちに端を発しているのである。つまり本作は、キリスト教が悪として禁じてしまった感情や行為、すなわち人間的欲望に深く連結した自己愛を、禁じるのではなく批判するのでもなく、ユダのありのままの姿として描いている。だからこそ太宰のユダは日本人にそれほど違和感無く受け入れられたと言えるのではないだろうか。このユダの存在意義は大きい。独善極まりない〈愛〉を第三者に理解させようというユダの訴えは、無条件の愛といいながら厳しい教えが存在するキリスト教的世界の価値観で認められなくとも、日本社会では必ずしも批判されることはない。太宰のユダが持つ〈愛〉は、人間にとって最も身近な感情なのである。

つまり、『駈込み訴へ』という作品は、新約聖書を舞台としながら、同時に日本的な物語の要素も持ち得ている作品であると考えられる。本作はキリスト教という土台を借りて極めて日本的な人間関係を描いたが、時代背景の影響から和綴じ本と『駈込み訴へ』という江戸時代の法制用語(注18)でもある題名にコーティングされたことで、あのようないびつな〈愛〉を持つユダ像が産み出されたのではないだろうか。

三　山岸外史著『人間キリスト記』とのかかわり

太宰の『駈込み訴へ』を考察するうえで無視できないのは山岸外史の『人間キリスト記』(注19)である。山岸は『人間キリスト記』を書くにあたって太宰とよく議論をしていたと言われており(注20)、次の随筆に見られるように『駈込み訴へ』と山岸外史の『人間キリスト記』の関係は濃厚である(注21)。

友人、山岸外史君から手紙をもらつた。(「走れメロス」その義、神に通ぜんとし、「駈込み訴へ」その愛欲、地に帰せんとす。)

また菊田義孝氏によると「『人間キリスト記』が、太宰の『女生徒』と並んで第四回北村透谷賞を受けたのは、昭和一四年秋のことである。当然、太宰は衆に先んじて、この本の内容を熟知していたはずで、その中の特に「ユダの章」が、「駈込み訴へ」を書くに際しての太宰の意識に、多少なりとも影を落としていたであろうことは想像に難くない」と指摘されている(注22)。

このように、二人は随筆で手紙の内容を発表するほどの仲であり、互いの作品や共通の話題であるキリスト教について語り合ったと考えられるため、この点については菊田氏の前掲論に賛同したい。しかしさらに、現在注目されている以上に、太宰の『駈込み訴へ』と山岸の『人間キリスト記』の関係は注目されていいものと思われる。

これを踏まえて山岸と太宰のユダ像を比較すると、明らかに互いの

影響を受けたと思しき表現が確認できる。山岸の「ユダの章」によると、ユダを「商人」の子であるとし、イエスに同行したのも自分の利益のためであるとはっきり書いている。これは新約聖書に書かれていない特徴であり、太宰のユダが同じく「商人」と明記されているのは明らかにこの箇所の影響であろう[注23]。また、リアリストである山岸のユダは、あくまで現世での成功を夢見ているのだと山岸は指摘している。

ユダは、恐らく、耶蘇が一匹の魚を割いては二匹とし、二匹の魚を割いては四匹とするあの魔術に心惹かれ、耶蘇を聖者と考へず、魔術師と考へ、その背後についていつたものなのに相違ない。一枚の金貨を、二枚にしたいと考へた。すべて、地上で楽に暮らせることばかり念願してゐた。

この山岸のユダ像からは、華々しい成功のためにイエスの〈魔術〉を会得する目的でついていっているという、ユダの金に対する執着の強固さがうかがえる。まさに「商人」としてユダが描かれていると言ってよい。このように、山岸のユダはイエスへの〈愛〉に生きるというよりは守銭奴として描かれているが、イエスを観察するうちに、イエスはユダが望むように現世での金銭や成功を求めていないと気づく。そこから次第にユダはイエスを理解したいと思うようになり、イエスを少しだけ尊敬するようになり、やがて「なんとかして、聖い人間にならうと努力し始め」ることになる。山岸のユダはイエスのために自ら変わっていこうとするのである。

最終的には、『人間キリスト記』の「ゲツセマネの園において」に見られるように、山岸のユダがイエスに対して抱いている思いが次のように結実することとなる。

耶蘇を売る役目ををへたユダは、耶蘇が囚れてゐる間、人垣の後の暗い木の幹によりそつて、不覚の涙を流してゐたのである。最後まで、耶蘇に求愛しながら、容れられなかつた自分の性の拙さを情ないものと考へてゐた。ユダは、この時、耶蘇の眼の中に、ほんの些かでも、自分を許してくれる眼色があるかと空頼みしてゐた自分の甘さを口惜しく考へ、耶蘇の冷たさを口惜しく思つた。

（傍線部は引用者による）

この箇所からもわかるように、山岸によるとユダはイエスに対し「求愛」していたと明記されている。この箇所以前では、ユダがイエスに抱いた好意的な感情として「すこしばかり、耶蘇に対して、尊敬の意を深めた」とあるだけで、後は「憎悪と怨恨」というような悪感情をあらわにしており、ユダのイエスへの「求愛」という言葉は初出である。山岸がなぜ唐突に「求愛」という言葉を出してきたのかは不明である。しかし太宰が山岸と意見交換をしたうえで、山岸は『人間キリスト記』を、太宰が『駈込み訴へ』を執筆したことは指摘のあるとおりである。であるならば、山岸は太宰が書けなかったエゴイストのイエスを[注24]、そして太宰は山岸が書けなかった「イエスに「求愛」するユダ」を、それぞれ分担して書いたのだとは推測できまいか。それが、太宰自身の「隣人愛」への葛藤から派生させたユダ像だとしても

(注25)、『駈込み訴へ』の製作過程において太宰と山岸との交流は無視できないと考えられるのである。太宰は、山岸から受け取ったバトンである「イエスに「求愛」するユダ」像を、時局的な制約をも跳ね除けて、あたかも問題提起するかのごとく大胆に描き出したのではないだろうか。

四　同伴者としてのユダ

これまで確認してきたように、太宰のユダは報われない〈愛〉のために生きているが、結局はイエスに〈愛〉されないまま物語は終結する。四では、それでもイエスへの〈愛〉を捨てきれないユダにはいったいどのような太宰の思いが込められているのかを明らかにしていきたい。

『駈込み訴へ』の発表前に書かれた「思案の敗北」(注26)には、太宰の持論が生々しく書き記されている。

ほんたうのことは、あの世で言へ、といふ言葉がある。①まことの愛の実証は、この世の、人と人との仲に於いては、つひに、それと指定できないものなのかもしれない。人は、人を愛することなど、とても、できない相談ではないのか。神のみ、よく愛し得る。まことか？

②みなよくわかる。君の、わびしさ、みなよくわかる。これも、私の傲慢の故であらうか。何も言へない。（中略）

人は、人を救ふことができない。まことか？

何を書かうか。こんな言葉は、どうだ。③「愛は、この世に存在する。きつと、在る。見つからぬのは、愛の表現である。その作法である。」（中略）

私は、いま、多少、君をごまかしてゐる。他なし、君を死なせたくないからだ。君、たのむ、死んではならぬ。自ら称して、盲目的愛情。君が死ねば、君の空席が、いつまでも私の傍に在るだらう。君が生前、腰かけたままにやはらかく窪みを持つたクッションが、いつまでも、私の傍に残るだらう。この人影のない冷たゐ椅子は、永遠に、君の椅子として、空席のままに存続する。神も、また、この空席をふさいで呉れることができないのである。④ああ、私の愛情は、私の盲目的な虫けらの愛情は、なんといふことだ、そつくり我執の形である。（傍線は引用者による）

太宰が傍線部④で「そつくり我執の形」と自覚する「私の愛情」とはどのようなものかと考えたときに、『駈込み訴へ』のユダと照らし合わせてこの随筆を読むと、太宰がユダに向けたメッセージだと読み取れるような気がしてならない。この意見は大いに牽強付会的であることは否めないし、ここで言われている「君」は誰とでも解釈することができるが、「君」をユダだと考えれば『駈込み訴へ』のラストでユダが自殺しないままに終了していることが気になってくる。太宰のユダは傍線部①の太宰と同じく、確かに本作においてイエスへの「まことの愛の実証」をしようと試み、そして無残にも失敗している。また傍

線部③の発言は、イエスへの〈愛〉を言葉にして第三者に理解してもらおうと苦しみ、最終的にそれを放棄してしまったユダが「愛の表現」を見つけられなかったことと一致しているのではないか。そして最も注目してよい箇所が傍線部②の発言である。

『駈込み訴へ』では、ユダはイエスに寂しさを見抜かれた春の海辺の場面でユダは感動するものの、イエスはユダの寂しさを慰める発言をしていない。ユダの取るべき態度について教え諭しているだけである。しかし傍線部②での太宰の発言は、本作のイエスの言葉よりもユダの寂しさをありのままに受け入れた言葉ではないかと考えられる。この随筆には、裏切り者として誰からも嫌悪されてきたユダという孤独なイエスの崇拝者を、太宰一人だけでもいいから救ってやりたいという太宰の思いが表れているのではないか。救うとまではいかなくとも、それがたとえ「我執」でも、孤独なユダの理解者でありたいと思ったのではないだろうか。

『駈込み訴へ』は、日本人太宰治から見た「ユダによる福音書」でもあっただろう。なぜ他の人間は救われて、ユダだけが救われなかったのかという疑問に真っ向から挑んだ太宰の、苦渋の作でもあっただろう。つまり『駈込み訴へ』創作にあたっての太宰の態度とは、いかに悪人でも弁解される権利はあるということを、あのような極端なユダ像の中に主張したのではないかと考えられる。太宰は、新約聖書では黙殺されたユダの真意を独自の感性でリライトしてみせることで、ユダの発言権を尊重したと言えるのではないだろうか。

さらに太宰は「キリストの己を愛するが如く汝の隣人を愛せよという言葉を、私はきっと違った解釈をしているのではなかろうか。あれはもっと別の意味があるのではなかろうか。そう考えた時、己を愛するが如くという言葉が思い出される。やはり己も愛さなければいけない」という点で苦しんでいた(注27)。太宰は聖書のユダの空白に思いを馳せ、またそれに共感することができた人間だと言うことができよう。本作において誇張され芝居じみたユダの感情は、聖書に触れ、自己愛だけでは実行できないイエスの〈愛〉を理解するのに苦しむ人々の代弁者としてユダが存在したことを示しているのではないだろうか。

聖書のイエスはしばしば同伴者としてとらえられる(注29)。どんなに苦しいときでもイエスは傍にいるという認識が信者の中に存在するのであり、そんな彼らにとってユダは確かに、聖書のイエスとは対極の罪深き人物であるだろう。だが筆者は、太宰のユダが同伴者としてのイエスのあり方と極めて似通った立場にいると考えている。過剰なまでに自身を正当化するユダの姿やユダが持つ感情は、日本人にとって、人間にとって最も身近な感情だということを考察してきたが、イエスの無償の愛も、太宰のユダの我執に満ちた〈愛〉も、どちらも人間の中に確かに存在する〈愛〉であり、たとえ後者の〈愛〉を抑圧しても無にすることはできないと考える。『駈込み訴へ』において、イエスが神聖なる〈愛〉の同伴者であるならば、ユダは俗と自己愛にまみれた〈愛〉の同伴者だとは言えないだろうか。太宰は、極めて人間的な〈愛〉を理解する人間として、またそれを受け止める人物としてユダを書い

たのだと思われる。太宰がユダに与えた役割とは、〈愛〉は〈愛〉でもイエスと対照的な位置にある〈愛〉を理解し同道する、人間らしい〈愛〉の同伴者だったのであろう。

注

1　『中央公論』（一九四〇年（昭和十五年）二月政変号）初出。本論のテキストは『太宰治全集4』（筑摩書房、一九九八年七月）より引用し、旧漢字は新漢字に改めた。

2　津島美知子氏は『回想の太宰治』（人文書院、一九七五年五月）で「太宰は炬燵に当たって、盃をふくみながら全文、蚕が糸を吐くように口述し、淀みもなく、言い直しもしなかった」と証言する。

3　渡部芳紀「『駈込み訴へ』論」（東郷克美・渡部芳紀編『作品論太宰治』双文社出版、一九七四年六月）

4　「「駈込み訴へ」と「西方の人」」（「解釈と鑑賞」一九八三年六月）

5　『筑摩書房版全集第四巻』解説（一九六〇年二月）参照。

6　陸根和氏は「『駈込み訴へ』論」（「実践国文学」一九九五年三月）において、『駈込み訴へ』研究が「作品世界と作者との境界がはっきりしないままに論が展開してゆく」こと、そして「「太宰治の文学世界」の中での『駈込み訴へ』の意義だけが問われてきた」という問題点を指摘しており、筆者もこの点に関して同意見である。

7　山田晃「論語・聖書・愛―「駈込み訴へ」雑記―」（『一冊の講座太宰治　日本の近代文学5』有精堂、一九八三年三月）など。山田氏は「イエスに対するユダの愛は、捨てる愛であり、与え尽す愛であることにおいて、ほとんど聖なる愛」であり同時に「利己の愛、奪う愛」であるとしている。

8　「太宰治「駈込み訴へ」と聖書」（「静岡近代文学」一九八六年九月）

9　佐藤泰正「「駈込み訴へ」と「西方の人」」（「解釈と鑑賞」一九八三年六月）

10　『「甘え」の構造』新装版（弘文堂、二〇〇一年四月）

11　土居健郎『続「甘え」の構造』（弘文堂、二〇〇一年二月）

12　「新人の世界―文芸時評―」（『文學界』一九四〇年三月）

13　『日本社会の家族的構成』（岩波書店、二〇〇〇年三月）

14　「日本封建制のアジア的性質」（『日本社会の家族的構成』岩波書店、二〇〇〇年三月）

15　一九八〇年（明治二十三年）十月に制定および発布。

16　「新人論―明暗と混合―」（『文芸連盟』一九四〇年二月）

17　佐藤泰正・佐古純一郎『漱石・芥川・太宰』（朝文社、一九九二年一月）

18　三谷憲正「太宰治「駈込み訴へ」試論―〈ヨハネ伝〉をめぐる基礎的作業を中心として」（「金沢大学国語国文」一九九八年二月）

19　『人間キリスト記　或いは神に欺かれた男』（第一書房、一九三

八年十一月）。本論では本書をテキストとして扱った。

20　田中良彦「太宰治とキリスト教―山岸外史との関係から―」（『武蔵大学人文学会雑誌』一九八三年十月）。田中氏は『駈込み訴へ』と『人間キリスト記』の共通点の一つとして「ユダは商売に関係していた人物とする点」を挙げている。

21　「自作を語る」（『月刊文章』一九四〇年九月）初出。

22　菊田義孝「ユダの心―「駈込み訴へ」と山岸外史著『人間キリスト記』」（『国文学』一九八七年五月）

23　20に同じ。田中氏によると、『駈込み訴へ』が影響を受けたものとして『聖書知識』と山岸外史『人間キリスト記』、さらに「山岸との交友」を挙げている。

24　『人間キリスト記』におけるイエス像は「耶蘇も、また、ひとりの虚無主義者であつたといふことは出来よう。（中略）耶蘇の虚無の心の底には、たつたひとつ『心の芸術』を完成し、『悲劇』を完成しようとする欲望があつた。（中略）徹底した虚無家でありながら、また、徹底した愛慾家であることを語つてゐる。」とある。山岸のイエスは、あくまで自身の死が目的という、言わば自殺志願の欲望を持った男であり、そのために生きているという点ではエゴイストと評しても構わないだろう。

25　太宰は「私の苦悩の、殆ど全部は、あのイエスといふ人の、『己れを愛するがごとく、汝の隣人を愛せ』といふ難題」（「如是我聞」（『新潮』一九四八年三月）と言及している。

26　「思案の敗北」（『文藝』（一九三七年十二月））初出。

27　「わが半生を語る」（「私は変人に非ず」（『小説新潮』一九四七年十一月））初出。

28　マーガレット.F.パワーズ「フット＝プリント」などに、人間の同伴者としてのイエスが表現されている。

（たなか　ようこ／平成十八年度博士前期課程修了）